

# 緒明山 OAKIYAMA-TSUSHIN 通信10



後期旧石器時代「陥し穴」の断面（横須賀市打木原遺跡）

発行日  
令和 5 年（2023 年）3 月 31 日

発行者  
横須賀市立中央図書館郷土資料室  
住所 神奈川県横須賀市上町 1-61  
電話 046-822-2077

本誌は印刷発行していません。次の図書館あるいは市史編さん事業のホームページからダウンロードしてください。カラーでご覧いただけます。  
<https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/>  
<https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/shishi1-top.html>

## 《 市史メモランダム 》

### おとしあな 三浦半島の後期旧石器時代「陥し穴」雑考

郷土資料室 佐藤明生

#### 1 はじめに

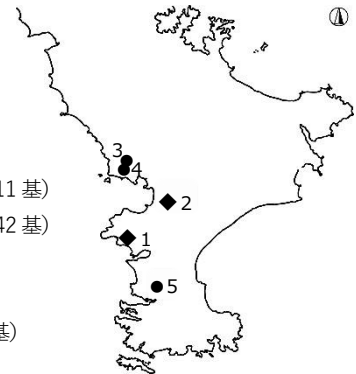
後期旧石器時代の前半期、今から3万年以上も前の時代に掘られた動物捕獲用の陥し穴が、三浦半島の西側の台地・丘陵上から数多く発見されている。陥し穴の特徴は、(1) ヒトが入れる程の大きさと深さがあること、(2) 一列の線状に並んで群集することである。そこで本稿ではこの二つの特徴を備える陥し穴を列状陥し穴群と呼ぶことにする。

列状陥し穴状群を検出した遺跡は、横須賀市長井の打木原(うつきばら)遺跡=計11基(註1)と同じく林の船久保(ふなくぼ)遺跡=計42基(註2)で、そのほか列状に配置するか判断できない陥し穴が3遺跡から発見されている(第1図参照)。三浦半島以外では静岡県の愛鷹山南麓～箱根西麓にあたる三島市に数多く所在する(註3)。今のところこの二つの地域の発見に限られており大きな謎になっているが(註4)、そればかりか、後期旧石器時代の陥し穴の発見事情は日本列島に限らず、世界史的に見ても稀有な現象である。

そこで本稿は、『新横須賀市史』刊行後(註5)の調査により新知見を得た船久保遺跡の成果を踏まえて、本市の列状陥し穴群について解説することを目的とする。まずは本題に入る前に、後期旧石器時代とはどのような時代かを概観しておきたい。

#### 2 後期旧石器時代とは

我が国における後期旧石器時代は、日本列島での



第1図 列状陥し穴群及び陥し穴発見遺跡

人類(現生人と同じホモ・サピエンス)の痕跡が拡大化する4万年前から縄文時代の開始までの狩猟・採集を生業としていた時代である。

この時代の特徴は、狩猟用石器を大量生産するために、石刃(せきじん)技法など高度な石器製作技術を確立した点にある。これにより原石の加工から石器の素材となる剥片(はくへん=石のかげら、石刃は両側縁が平行する縦長剥片)を連続的に打ち欠くことを可能にした。

縄文時代の始まりについては研究の視点で諸説あるが、土器の出現とした場合は1.5～1.6万年前である。そのため後期旧石器時代は約2.5万年続いた。ただし、縄文時代への移行は線引きできるわけではなく、土器が出現しても細石刃石器などの後期旧石器時代的の石器製作は続く。

当時の気候は、最終氷期(9万年前～)の後半にあたり、寒冷期の年平均気温は現在より7℃低く、海水面は100m程低かった。現在の横須賀の平均気温は17.2℃であるが、札幌や函館は9℃前後のため、当時の横須賀は今の札幌ほど寒くはないようだ。

当時の植生については、打木原遺跡の発掘調査で実施したプラント・オパール(植物珪酸体)分析では(註6)、タケ亜科(クマザサ・ネザサを含む)が突出して

多く、次にウシクサ属(ススキを含む)を検出した。そのため、クマザサやネザサ(篠竹)、ススキが生い茂る台地であったことがわかる。また、炭化した木質の破片が出土したため付近に樹木が生育していたことも事実である。炭化材の樹種は同定できなかったが、広葉樹と針葉樹の両方が検出された(註7)。

これらの科学的分析結果から、草原と落葉広葉樹林や針葉樹林が混在する景観であったと考えられる。そして、落葉広葉樹林に実る堅果類を採集していた様子を思い描くこともできよう。

次に南九州の始良(あいら)カルデラの噴火による広域降下火山灰(始良 Tn 火山灰、略記号=AT、以下 AT と記す)について簡単に触れておく。

AT は北海道を除く日本列島(註8)に広く降灰しているため、後期旧石器時代の年代指標として非常に重要な火山灰である。後期旧石器時代を前半期と後半期に分ける場合、AT の降灰を境とする。

AT の降灰年代は、放射性炭素の年代測定法や暦年較正が進み、近年では約 3 万年前(註9)に定着し

ている。この数値に従えば列状陥し穴群は、AT を含む層より下位にあたるため 3 万年を超える時代の所産となる。AT は火山灰といっても偏西風に乗って飛来してくるものは、軽く舞い上がりやすい微細な火山ガラスである。大量の火山ガラスが長期間大気中に舞い続けた結果、太陽光を反射し気温の低下を招いたといわれる。加えて火山ガラスを吸い込むことによる健康被害も甚大と思われ、AT の降灰はヒトに限らず動植物にも大きな影響を及ぼした。

### 3 陥し穴の形態上の特徴

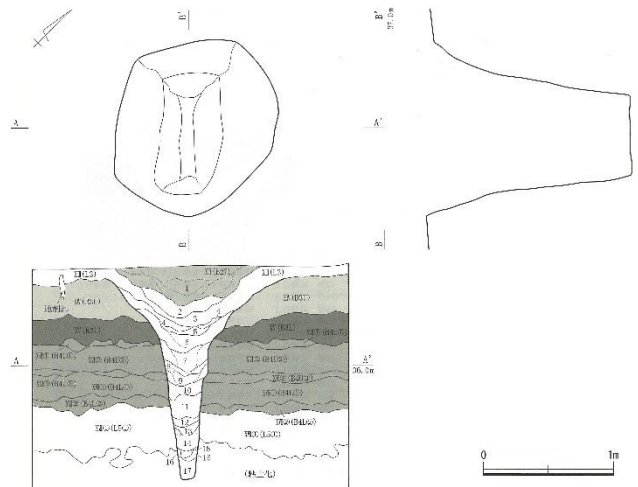
横須賀市内で発見された陥し穴は、次の円形陥し穴と長方形陥し穴の 2 種類に分けられる。

#### 円形陥し穴(第 2・3 図参照)

平面形が円形で、断面形が逆台形、つまりコップあるいはバケツを細長くしたような形である。深さは打木原遺跡の場合、掘り込み面がわかる地層断面観察によれば 1.65m 以上を測る。船久保遺跡では最大 1.85m を測る。



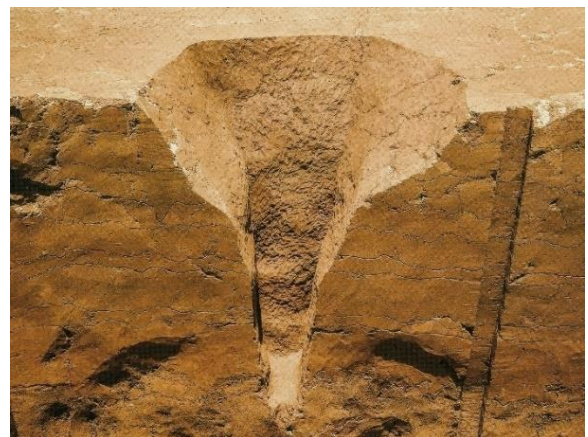
第 2 図 打木原遺跡 SK05~08 (註 10)



第 4 図 船久保遺跡 P 10 号陥し穴実測図(註 12)



第 3 図 打木原遺跡 SK08 断面(註 11)



第 5 図 船久保遺跡 P 10 号陥し穴完掘状況(註 13)

### 長方形陥し穴 (第4・5図参照)

平面形は長方形で、上部が崩落すると楕円形状になる。断面形は長軸が極端に狭くなり漏斗状を呈する。深さは船久保遺跡で地層断面観察ができたものに限れば、1.55m、1.60m、2.07mである。

打木原遺跡の列状陥し穴群は円形のみであるが、船久保遺跡では円形と長方形の両方が検出された。愛鷹山南麓～箱根西麓地域のもは円形陥し穴に限られている。そのため、長方形陥し穴は船久保遺跡が唯一の発見例である。

この2種類の陥し穴は形態だけでなく造営時期に違いがあることがわかっている。どちらもATを含む層の下位から検出された点で共通するが、円形陥し穴は、打木原遺跡での地層断面観察の結果、陥し穴の掘り込み面から30～40cmほど上部にATを含む層が堆積する。つまり、陥し穴が完全に埋まりきりある程度を経過してからATが降灰したことを示している。

一方、長方形陥し穴は穴の内部に堆積した土壌からATが検出された。陥し穴が埋まりきる前にATが降灰したことが明らかである。そのため、長方形陥し穴は円形陥し穴より新しいことがわかる。

### 4 陥し穴の並び方

円形・長方形どちらの陥し穴も第7・8図に示すように直線的あるいは緩やかな弧を描いて並んでいる。その列の長さは打木原・船久保遺跡ともに調査区域内だけで90mを超える。列状陥し穴群が造営された土地は、等高線の間隔から尾根や谷の存在が読み取れるが、それほど的高低差はなく緩やかな傾斜地である。

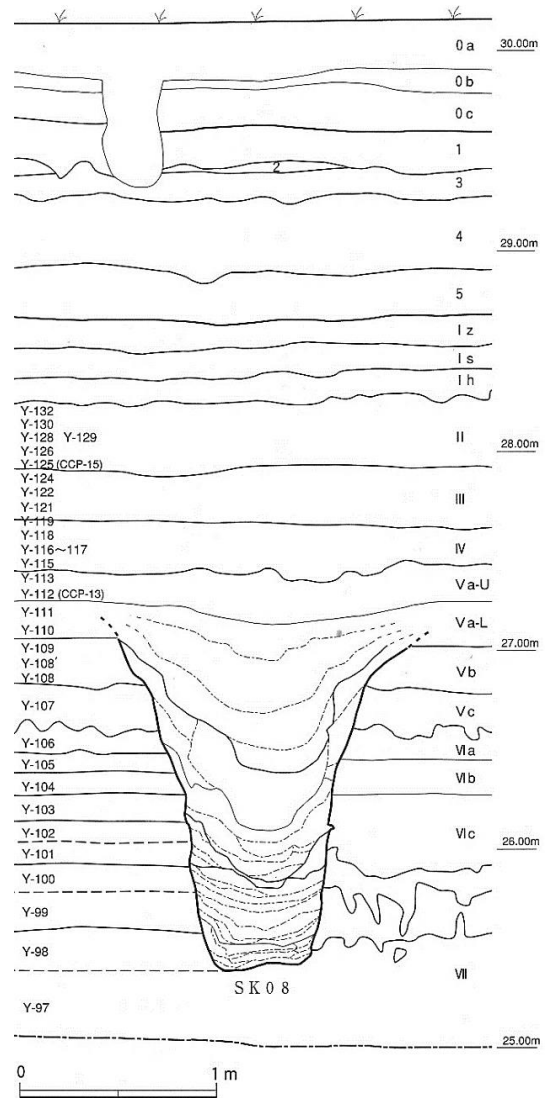
陥し穴は等間隔に並ぶ部分もあれば、間が詰まったり逆に空いたりもする。一定間隔が理想とするなら間が詰まっている原因は、同時存在より時間差にあると考えるべきで、逆に間が空く場合は、別の陥し穴列を想定するべきかもしれない。

### 5 陥し穴と判断する理由

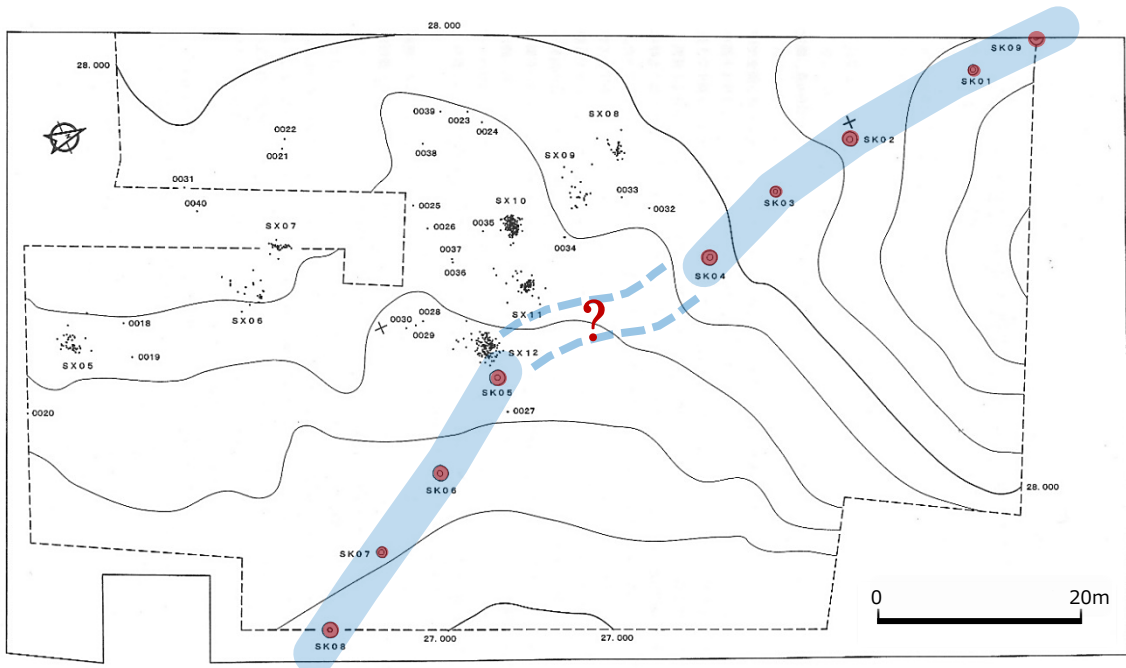
陥し穴であることを確認する情報は得られていない。穴の内部の土壌堆積状況に加えて、穴の大きさや狩猟採集の時代という時代背景などを絡み合

わせて、動物捕獲用の陥し穴と考えられている。

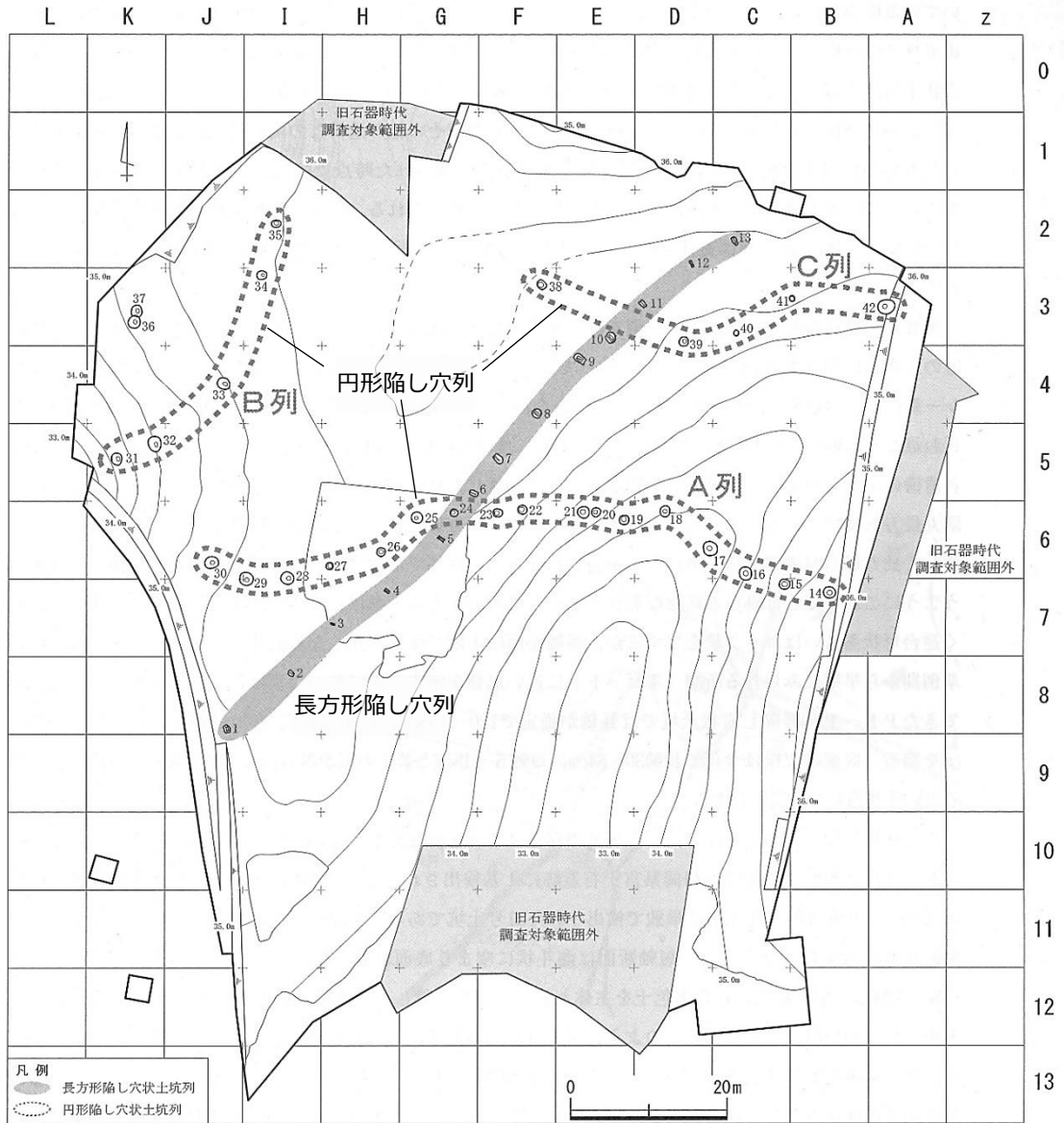
陥し穴の断面を観察すると、その内部を埋め尽くす土壌が弧を描いて堆積していることがわかる(第6図参照)。これは穴の底から徐々に土が溜まっていった結果であり、レンズ状堆積と呼ばれる土壌堆積である。つまり、陥し穴としての使用後は開口したままで、そこに土壌が流入・堆積して埋まりきったことを示している。例えば、墓穴や柱穴の場合、掘り上げた土を一気に埋め戻すためレンズ状堆積にならない。貯蔵穴であれば貯蔵物に関する痕跡などが残されていてもよいだろう。このように消去法的に導き出された仮説であることも否めないが、妥当な判断ではないかと解する。



第6図 打木原遺跡 SK08 断面図(註14)  
0層は盛り土層, 1～5層は縄文時代以降の黒色土層, I～VI層は関東ローム層(立川ローム層), VIIは関東ローム層(武蔵野ローム層), ATはIV層中のY-118.



第7図 打木原遺跡：列状陥し穴群と出土遺物の分布図〈註15〉



※コンターは、B3L層上面。

第8図 船久保遺跡：列状陥し穴群分布図〈註16〉

## 6 捕獲対象動物について

日本列島に生息する動物群は、海水面が低下して朝鮮半島やシベリアと陸続きになっていた氷期に、大陸から渡ってきたと考えられている。朝鮮半島経由の動物群の主たる構成種は、ナウマンゾウやオオツノジカ、シカ、イノシシ、タヌキ、ノウサギなどである。一方、樺太経由でシベリアからきた動物群の主たる構成種はマンモスゾウやヒグマ、ヘラジカ、エゾシカなどである。三浦半島では10~40万年前の地層からナウマンゾウやオオツノジカの化石が発見されており〈註17〉、朝鮮半島経由の動物群が生息していた実態が明らかである。

では、列状陥し穴群による狩猟はどのような種の動物を対象にしていたのであろうか。残念ながらここでも実証できる資料、例えば、動物を象った彫像や絵画などの考古遺物、骨や牙・角などの動物遺存体、足跡などの存在痕跡は確認できていない。

そのため推論ではあるが可能性を述べておきたい。以下、話を進めるにあたり縄文時代の陥し穴と比較していく。

縄文時代にも陥し穴が数多く掘られており、しばしば群集し、列状に並ぶこともある。平面形は楕円形や隅丸長方形が多く、円形や非常に細長く幅の狭いものなどバラエティに富む〈註18〉。三浦半島に近い神奈川県内の台地・丘陵や多摩丘陵などで多量に発見される陥し穴は楕円形や隅丸長方形で、深さはヒトの腰から胸ぐらいのものが多く、後期旧石器時代の陥し穴と比べて相対的に浅い〈註19〉。

朝鮮半島経由の動物群のうちナウマンゾウとオオツノジカは縄文時代に入る前に絶滅しているため、縄文時代の捕獲対象はシカやイノシシ、タヌキ、ノウサギなどである。つまり中型~小型の動物を捕獲するための陥し穴は、それほど深く掘らなくても十分であったともいえる〈註20〉。

では、後期旧石器時代の陥し穴はなぜ深く掘ったのか、あるいは掘らざるを得なかったのだろうか。

それは、捕獲対象がナウマンゾウやオオツノジカなどの大型獣であったからと考えたい。これらの大型獣は一頭でも仕留めれば大きな成果となる点が魅力であるが、その生産性は低かったと予想する。しかも後述するように小さな石器を装着した槍に

よる狩猟は小型獣を対象にしていることから、大型獣の捕獲には適さない。そこで、陥し穴狩が成立したのではないだろうか。しかも、いくつもの陥し穴を掘り、それを管理するためには相当な労働力と人員体制が必要である。少人数でまかなえるものではない。後期旧石器時代の陥し穴狩はナウマンゾウやオオツノジカなどの大型獣を組織的に狙っていた集団による可能性を指摘しておきたい。

陥し穴が深いとはいえナウマンゾウやオオツノジカの全身が入るほどの規模はない。ただし、ナウマンゾウの足が一本でも落ちれば、動きを封じ込めることができる。その足が陥し穴の底につかず宙に浮いていれば、足に力を含めることはできずに体力を消耗する。つまり、陥し穴の深さはナウマンゾウの足の長さ+ $\alpha$ から導かれていると予測する〈註21〉。

さて、陥し穴には二つの型があると述べたが、上記は円形陥し穴に当てはまる推論である。では、幅の狭い長方形陥し穴の場合はどうか。

長方形陥し穴は、陥し穴の中ほどから下部が著しく狭くなっている。この幅ではナウマンゾウの足は入りにくい。狭いことで挟み込むという効果も考慮されるが、たとえ落ちたとしても脱出してしまうリスクは避けられない。長方形陥し穴は足の太いナウマンゾウには適さず、一方で足先の細いオオツノジカやシカの捕獲には適している。

ここから更に推論が進むが、では何故オオツノジカを捕獲対象にした長方形陥し穴が誕生したのか。これについては円形陥し穴と長方形陥し穴では時間差があり、長方形陥し穴が新しいことを既に説明したが、ここに大きなヒントがある。つまり長方形陥し穴で狩をする時代には、ナウマンゾウは既に生息していなかったのではないか。そのためオオツノジカやシカを捕獲対象にした幅の極端に狭いタイプの陥し穴が考案された。ということは、円形陥し穴造営期と長方形陥し穴造営期の間に、少なくとも三浦半島ではナウマンゾウが絶滅していたことを示唆する。絶滅の理由は気候変動など自然的要因もあろうが、乱獲などの人為的要因も考えられよう。

## 7 石器による狩猟について

列状陥し穴群造営期の石器による狩猟とはどの

ようなものであったのだろうか。第9・10図に打木原遺跡と船久保遺跡の列状陥し穴群造営期の狩猟用石器を示した。

打木原遺跡はナイフ形石器が1点出土したのみで、長さ36.8mm、重量3.6gを測る。船久保遺跡からはナイフ形石器の他に台形様石器が出土しているが(註22)、長さ58.3mm、重量9.63gとやや長いナイフ形石器が1点あるが、そのほかは長さ24.6~37.4mm、重量1.14~9.65gである。概して狩猟用石器の出土量は少なく、寸詰まりの縦長剥片や不定形の剥片を加工した小さくて軽いものが多い。

これらの石器を装着した槍を想像しても、その柄はせいぜい径10mm程度の篠竹ぐらいしか思いつかない。この程度では突き槍・投げ槍問わず大型獣を

仕留める威力があったのか疑わしい。この時代の弓は確認されていないが、何らかの投擲具(投槍具)があったとしても難しいだろう(註25)。つまり打木原遺跡や船久保遺跡の小さな狩猟用石器は、鳥類を含めた小型獣を捕獲対象にしたものと考えられる。

愛鷹山南麓~箱根西麓の列状陥し穴群と狩猟用石器の関係については、列状陥し穴群造営期に限り、「長径に対する刃部長が相対的に短いナイフ形石器が主体を占めるようになる」と表現し、前後の時期のナイフ形石器より小さいとの指摘がある(註26)。

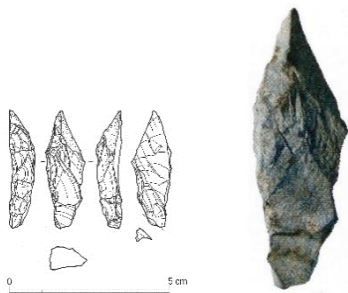
このように三浦半島と愛鷹山南麓~箱根西麓の両地域にみられる狩猟用石器の共通性から、小型獣用の小さな狩猟用石器は普遍的に存在しつつも、大型獣の捕獲手段が長身の石器から陥し穴に置き換えられた可能性を読み取ることができる。

## 8 まとめ

後期旧石器時代、狩猟は生産活動の大きな関心事であった。そのため、生産性向上のために知恵を絞ったことであろう。ナイフ形石器などの狩猟用石器をみても、製作技術や形状が徐々に分化していく。その様相は日本列島内で一様に移り変わるものではなく、特に列島各地の石器石材産地の影響を受けて地域化が進んでいく。

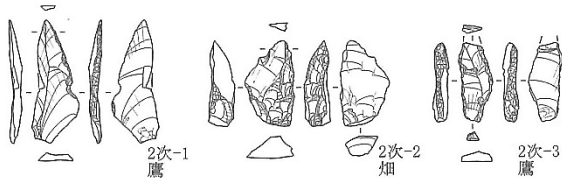
石器にみられる地域性を鑑みると、列状陥し穴群も汎日本列島的に存在したものではなく、地域的偏在性の高い狩猟法であったのかもしれない。その際、現状で列状陥し穴群が発見されている愛鷹山南麓~箱根西麓地域と三浦半島の両地域における狩猟文化の共有は、石器石材の流通に伴うヒトや物資の移動及び情報の伝播と不可分ではないだろう。

石器を作るためにはその石器に適した石材が必要であるが、特に狩猟用石器は鋭利な刃部を作り出す必要があるため石材が限られてくる。例えば黒曜石やチャート、サヌカイト、硬質細粒凝灰岩、珪質頁岩、ガラス質黒色安山岩など石質が緻密で加工しやすい石材が求められた。こうした石材を産出しない三浦半島でも箱根や信州の黒曜石が出土するが、三浦半島に住むヒトが箱根や信州まで黒曜石を採掘に行く姿は想像できない(註27)。三浦半島に黒曜石が運ばれてくる仕組みには、黒曜石の採掘から原

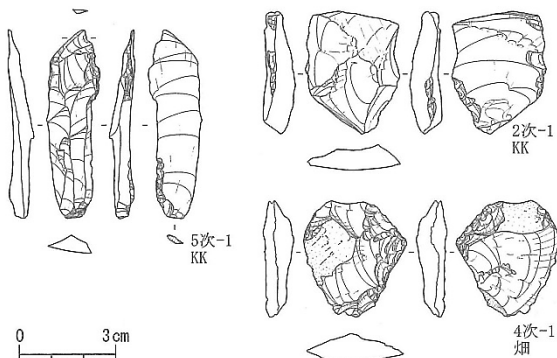


第9図 打木原遺跡出土の狩猟様石器(ナイフ形石器)  
石材は硬質細粒凝灰岩。写真はほぼ原寸(註23)

### 第Ⅲ文化層(L3)



### 第Ⅳ文化層(B3)



第10図 船久保遺跡出土の狩猟様石器(註24)  
上:長方形陥し穴の時期(いずれもナイフ形石器)  
下:円形陥し穴の時期(ナイフ形石器と台形様石器)  
石材は、珪質頁岩(KK)、黒曜石(信州鷹山産・箱根畑宿産)

石加工、それを各地に運ぶ流通システムが成立していたとみるのが矛盾のない考え方である。

獲得した石器石材から狩猟用石器を製作し狩猟具に仕上げる。そして、狩猟活動の第一歩はヒトが動物の棲む縄張りに踏み込んで仕留める方法であろう。その際、狩人が複数であれば周囲から獲物を追い込むことが可能になる。さらにはヒトの縄張りもしくはヒトが管理する猟場への追い込み猟へと、組織化していくかもしれない。

多様な狩猟法がある中で陥し穴猟については、その解釈をめぐって、ケモノ道に掘り偶々落ちるのを待つのか、追い込み猟により陥れるのか、発掘調査では確証の得難い問題が立ち上がる。ただし、前述のとおり、大型獣を組織的に狙っていた集団による可能性を見込むならば、列状陥し穴群に追い込み猟が実体化されていたとしても不思議ではない。

このような列状陥し穴群による狩猟が成立した背景を考える際、まず、狩猟用石器の大量生産に伴う動物資源獲得の強化が人口増を促したであろう当時の社会を底辺に据えておく。その上で、人口増に伴う更なる生産力の増大化に迫られながらも、石器石材が流通しているとはいえ十分な質と量が供給されなかった地域では、新たな狩猟法を開拓せざるを得なかった事情を想定しておきたい。

最後に、列状陥し穴群が愛鷹山南麓～箱根西麓と三浦半島の二つの地域で発見されている理由については、日本列島内における狩猟法の地域的偏在性による可能性を述べたが、それにしても二つの地域だけとは考えにくい。広大な面積を発掘調査すれば事例は増加するものと推察するが、富士山の東側では偏西風の影響で関東ローム層を構成する火山砕屑物や風化火山灰が厚く堆積している。それが一因となって陥し穴の発見を妨げていることも否めない。ATを含む層までの深さは、打木原遺跡の場合、盛土層を除くと旧地表面から2 m程度だが、相模野台地では現地表面から5～6 mにも達する。この深さでは広範囲の発掘調査は困難を極める。火山灰台地という地理的要因こそ列状陥し穴群が各地で発見されない理由とみて差し支えないだろう(註28)。

今後、調査事例が増加することで、陥し穴猟の実態解明と世界的にも類例をみない狩猟文化が日本

列島で育まれた特殊性の解明に向かって道が開けるかもしれないが、そのためには、氷期における細かな気候変動と食料資源に関する自然科学的な研究の進展を期待し、列状陥し穴群そのものの調査・研究とともに、列状陥し穴群と狩猟用石器との関係では、石器石材の産地及びその流通、器種の大小の分化に関する整理が基礎的な課題となろう。これらの作業をとおして我が国における後期旧石器時代の生産活動をより浮き彫りにできると考える。

#### 謝辞

ナウマンゾウの計測にあたり横須賀市自然・人文博物館の柴田健一郎学芸員からご協力・ご教示を得た。同博物館には2021年度「よこすか歴史物語2」での発表の機会をいただいた。郷土資料室の谷合伸介・宮城睦・堀井由貴子各氏には校正などの手を煩わせた。ここに記して感謝の意を表する。

#### 註釈

註1 打木原遺跡の陥し穴 11 基は、長井台地遺跡群の確認調査で発見した2基(引用・参考文献1)と打木原遺跡の調査で発見した9基(引用・参考文献2)の合計である。

註2 引用・参考文献7

註3 愛鷹山南麓～箱根西麓では14遺跡から陥し穴が発見されており、伊豆半島にも分布する(引用・参考文献6b)。なお、列状陥し穴群の初見は三島市初音ヶ原遺跡の1986年で、打木原遺跡の陥し穴も同年に発見されており、この年が列状陥し穴群の調査研究元年となる。

註4 後期旧石器時代前半期の陥し穴は、線状に並ばないものであれば九州からも発見されている。市内佐島の一本松遺跡、高原北遺跡、三浦市がんだ畑遺跡の陥し穴も線状に配置するか判別できないため、本稿では詳述しないことにした。陥し穴の形状はいずれも円形である。

註5 ここでは、引用・参考文献3・4に限る。

註6 引用・参考文献2 P.114-124

註7 註6に同じ

註8 後期旧石器時代の日本列島は、海水面の低下により、本州・四国・九州が一つの島になっていたため「古本州島」と呼ばれている。この時代は朝鮮半島とは陸続きではない。ちなみに東京湾はなく、現在の三浦半島と房総半島との間には古東京川が流れていた。

註9 後期旧石器時代の概要は、引用・参考文献4を底本とするが、考古学の実年代観は科学的分析に基づくため、研究や分析手法の進展により常に変化している。ATの降灰年代など、本稿での実年代観については引用・参考文献5を参考にした。

註10 引用・参考文献2 巻頭図版(一部トリミング)

註11 註10に同じ

註12 引用・参考文献7 P.92第67図

註13 引用・参考文献7 巻頭図版2-2

註14 引用・参考文献2 P.10第5図を加工

註15 引用・参考文献2 P.54 第33図を加工。打木原遺跡の陥し穴は、長井台地遺跡群の確認調査で検出した2基が、第7図の右側、約60mと92m離れた位置に所在する(引用・参考文献1 P.17~)。9基と2基の間は未調査。

註16 引用・参考文献7 P.279 第189図を加筆。

註17 三浦半島におけるナウマンゾウとオオツノジカの生息実態は、それらの化石が発見されているため明らかである。特にナウマンゾウについては、1867年/慶応3年に横須賀製鉄所第一号船渠の建設のために白仙山を掘削中、フランス人医師サヴァティエが化石を発見し、その後ドイツ人地質学者ナウマンが1881年/明治14年に「史前時代の日本の像」と報告したエピソードが伝わる。これが最初のナウマンゾウ化石の発見であるが、ナウマンゾウと命名されるのは後のことである。ナウマンゾウの化石は市内西部の大木根からも発見されている。こちらは40万年前のもので現状最古の化石である。オオツノジカの化石は市内大津からの発見である(引用・参考文献4, 自然P.22~24)。ただし、これらの化石は10万以上前の地層からの発見であり、その後、後期旧石器時代まで脈々と生息しつづけた確証は今のところない。

註18 引用・参考文献6でいくつかの事例を確認できる。

註19 筆者の縄文時代の陥し穴に対する認識は、調査経験等に基づくもので、全国の陥し穴の計測値を集成し分析した上での判断ではない。ただし、船久保遺跡では縄文時代の陥し穴も22基発見されており、掘り込み面が想定できるものに限れば、その深さは、103、133、134、150cmである(株式会社玉川文化財研究所 2014 船久保遺跡神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書19)。

註20 縄文時代の陥し穴は、深く掘らない代わりに逆茂木(さかもぎ。陥し穴の底に複数の竹を打ち込む、あるいは陥し穴の底の中央をさらに掘り窪めて木杭を埋め込む等)を設置して捕獲効果を高めていた。逆茂木の痕跡がなくても陥し穴上部に網をかぶせるなどの手段も想定され、陥れた動物の動きを封じる工夫を図っていた点の特徴である。本稿では、後期旧石器時代の陥し穴と単純に深さだけを比較したが、縄文時代の陥し穴の特徴は十分に留意しておく必要がある。

註21 ナウマンゾウの足の長さを調べるために、横須賀市自然・人文博物館のナウマンゾウ骨格標本(「印旛沼標本」の複製)の前足を計測してみた。その値は肩甲骨の下から142cmであった。前足が陥し穴に落ちた場合、胸骨から肋骨付近が地上に接地するため、地上から胸骨までを測ると89cmであった。このナウマンゾウ骨格標本の肩高は約2mで小型のため、平均的なナウマンゾウの雄の肩高を2.4~2.8mとした場合(高橋啓一 2022 「ナウマンゾウ研究100年」琵琶湖博物館研究報告第35号)、前記の前足の骨と肩高の値の比率に基づくと、前足の骨の長さは170~199cm、胸骨までの高さは107~125cmになる。ただし、生体の足の長さは皮膚や皮下脂肪、筋肉を考慮する必要があり、陥し穴へ落下した場合は足(前足なら脇にあたる部分)が外側にどのくらい広がるかでも異なる。理想とする陥し穴の深さの算出は難しい。

なお、ナウマンゾウはその足跡化石から(横須賀市自

然・人文博物館常設展示物=野尻湖出土の足跡レプリカ)、通常歩行に限れば前足の跡を後足が踏むため、陥し穴には前足から落ちる可能性が高い。追い込み猟における錯乱時の行動は想定外。

註22 ナイフ形石器はナイフ様の形であるが狩猟具である。台形様石器もその形状から名付けられているが、同様に狩猟具である。両者は製作技術が異なるが共存する。

註23 引用・参考文献2 巻頭図版+P.92 第60図を加工

註24 引用・参考文献7 P.274 第186図を加工

註25 篠竹などが生育する自然環境を踏まえると、ササやタケ類の弾性を利用した道具の存在を無視できない。

註26 引用・参考文献6b

註27 ヒトの行動範囲について引用・参考文献4では、生活戦略としての陥し穴猟を展開した集団がいたことを評価した上で、その集団の生活領域を「半島全域から横浜市南部におよぶ地域」と想定している。

註28 陥し穴が発見されにくい事情は、石器などの伴出遺物が少ないため、確認調査をしても本発掘調査実施の決め手になる情報が得られにくいことも一因であろう。

引用・参考文献(本文に直接関係するものに限る)

- 1 稲村繁・佐藤明生・中三川昇 1990.3 長井台地遺跡群 横須賀市文化財調査報告書20
- 2 佐藤明生ほか 2002.3 打木原遺跡 横須賀市埋蔵文化財調査報告書10
- 3 矢島國雄ほか 2010.3 新横須賀市史 別編・考古
- 4 矢島國雄 2012.5 新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世 「第一章 旧石器時代」
- 5 日本考古学協会編 2018.11 日本考古学・最前線
- 6 ニューサイエンス社 2019.12 考古学ジャーナル734 特集 陥し穴研究の現状
  - 6a 麻生順二 神奈川県三浦半島の旧石器時代陥し穴
  - 6b 池谷信之 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代陥し穴
- 7 麻生順司・石川真紀ほか 2020.2 船久保遺跡第5次調査 神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書77

## あとがき

今号では、市史メモランダムとして本市の後期旧石器時代に関する“三浦半島の後期旧石器時代「陥し穴」雑考”をお届けしました。本稿は令和4年2月27日に横須賀市自然・人文博物館で開催された「よこすか歴史物語2」で発表した内容を中心に再構成したものです。

なお、本誌は印刷発行せず、ホームページからダウンロードしていただく方式により無償で頒布しています。

## 図書館 HP「デジタルアーカイブ」のご案内

横須賀市立図書館ホームページでは、「デジタルアーカイブ」のページを開設しています。戦前の絵葉書や写真等の郷土資料のほか、『緒明山通信』(旧『横須賀市市史資料室通信』)のバックナンバーもご覧いただけます。

下に記した URL か右側の QR コードからアクセスしてください。

<https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/>

